

再発する良性腫瘍

藤田 修治
(高槻赤十字病院 耳鼻咽喉科)

要旨 頭頸部領域に発生する良性腫瘍には再発傾向に富むもの、悪性化するものがあり、適切な治療をしても起こりうる。どうせ良性と侮って大きくなるまで長期間受診せず、不幸な結果になることがある。結果に対する患者の不満から、医療トラブルとなることもある。今回、実際に経験した症例を提示し、当院耳鼻科で行っている対策について論じる。本人が病理組織名を正しく記憶し、再発傾向、悪性化に富む腫瘍であることを理解してもらうことがまず必要である。長期間経って再発することもあり、医療機関の記録、記憶がなくなっていることも多い。治療を行った医療機関のみではなく、紹介医、かかりつけ医に再発傾向、将来の悪性化の情報を提供し、共同で長期間診ていくことを提言したい。

症例1 55歳男性。30年前に耳下腺腫瘍で他院にて手術歴あり、2年前より腫瘤があり徐々に増大していたが放置していた。糖尿病、心筋梗塞後、僧帽弁、三尖弁の閉鎖不全症。肺結核の既往あり。肥満でヘビースモーカー。左耳下部に6cm大の腫瘍あり、視診触診で皮膚浸潤あり。悪性を強く疑ため、集学的治療が必要になると考えて大学病院を紹介した。術後病理組織診断では多型腺腫で悪性所見がなかったと報告がきた。しかし、数ヵ月後突然本人が当院を受診。その後多発肺転移が見つかり、それもなかなか見つけてもらえなかった、大学病院にクレームをつけもうあそこには行かない、と一時間以上にわたって外来診察室でまくしたてた。数回にわたって同様の不満を訴え、そのたびに外来診察が滞った。特殊な治療を求めてあちこちの病院を受診したが、いずれも断られ、結局他院の緩和ケアにて死亡した。

耳下腺多型腺腫は肉眼的皮膜を超えたところに衛星病変があり、健常部を付けて切除するが、顔面神経を温存するために、十分な安全域は取れないことも多く。しばしば局所再発、時には悪性化する。再発率は報告により観察期間が異なるため一概に言えないが、長期観察するほど増え、長期では再発率は15%ほどになり、決して少なくない。本人が病理組織名を正しく記憶し、経過観察が途絶えないようにすることが肝心である。

喉頭乳頭腫、副鼻腔乳頭腫も同様に再発傾向に富み、悪性化もある。当院11年間の自験例では喉頭で3例中1例、副鼻腔で14例中2例が悪性であった。

症例2 74歳女性。30年前に他院で甲状腺腫瘍摘出術。良性と言われた。背部痛あり、転移性骨腫瘍の疑いで生検し、甲状腺癌骨転移と判明。その後肺転移、頸部腫瘤も出現。緩和治療を求めたところ当院緩和ケアを紹介され入院した。腫瘍の性質上、進行は緩徐で、腫瘍量が多くとも全身状態は割に良好で意識も清明であり、緩和ケアに2年以上入院しようやく苦痛から解放された。

甲状腺濾胞腫瘍は病理学的に良悪の区別が困難な腫瘍であり、転移がなければ脈管、皮膜浸潤のわず

かな有無で判断しているのが現状である。そのため良性と思われても、後に遠隔転移を起こし、実は悪性であったが最初は証拠がつかめなかったものがどうしてもある。悪性の所見がなくても、良性とは限らないこと、将来悪性であることが判明するかも知れないこと、定期的な経過観察を怠らないことが正しい理解と対処であるが、実際には良性と説明を受け、経過観察も途絶えているケースが多い。

考察 数十年して再発することもあり、腫瘍の正確な記録がなくなっていることも多い。避けられる不幸なケースを減らすためには、まず本人、家族が病理組織診断名を覚え、腫瘍の性質を正しく理解することである。当院では説明の上、日本語訳をつけた文書で手渡し、診察のたびに正式名称と再発傾向、悪性化について言及している。勤務医冬の時代にあって、記録のみならず、診療科はては施設そのものもなくなることもありうる。患者も遠方に転居することがある。治療を行った医療機関のみではなく、紹介医、かかりつけ医に再発傾向、将来の悪性化の情報を提供し、共同で長期間診ていくようにしている。診療所は2代3代と続くこともあり、記録保存も病院より長期間管理できていることも多い。家族の情報も病院より詳しく把握、記憶していることが多い。転居の際には詳細な情報を現地の病院、新しいかかりつけ医に提供している。個人情報管理には留意が必要であるが、本人了解のもと、家族やかかりつけ医を含めた周囲の人に病気の性質を正しく知ってもらい、長期間経過観察が途絶えないように支援することが、不幸なケースを減らすことにつながると考える。

参考文献

耳下腺腫瘍臨床の最前線 耳下腺多型腺腫手術とその問題点（解説） 永田基樹 頭頸部癌 34巻3号pp355-359(2008).
甲状腺濾胞癌の組織学的診断(総説) 加藤良平 診断病理19巻2号 pp93-96(2002)

頭頸部腫瘍の問題点

良性であっても再発傾向に富むもの、悪性化するものがある
長年経って再発し、前回の手術、病理の記録が残っていないことがある
再発してもどうせ良性と侮って受診が遅れる傾向がある

不幸なケースを減らす対策

本人に病理組織診断名、腫瘍の性質を口頭および文書で説明、病理組織診断名を正しく記憶してもらう
長期にわたる経過観察が途切れないようにするために、家族、かかりつけ医に協力してもらう